

2023.1  
(公社)富山県薬剤師会  
広報誌

# とよ や 富 薬

1号

第45巻  
No.402



ヌルデ *Rhus japonica* L.

(ウルシ科 *Anacardiaceae*)

**生薬** ゴバイシ（五倍子）若芽に寄生したヌルデノミミフシの幼虫が作った虫癭を秋に採取し熱湯で煮て殺虫し、乾燥する。

**成分** タンニン：penta-m-digalloyl- $\beta$ glucose, gallic acid, m-digallic acid、脂肪、樹脂、デンプン、ロウ質等。

**効能** 収斂、止瀉、鎮咳、止血、止汗薬として慢性の下痢や咳嗽、脱肛、盗汗、鼻出血、痔出血に用いた。現在ではタンニン酸、没食子酸、ピロガロールの製造原料として、工業用の染料、皮なめし、インク原料に用いられる。

元富山県薬事研究所  
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

## 〇〇表紙について〇〇



『本草綱目啓蒙』(1803)の「塩麩子」に「フシノキ、ヌルデ、ヌデ(濃州)、ヌリダ(備前)、ユルデ(佐州)、ノデノキ(尾州・上総)、カツキ(能州)、カツギ、カツノキ(奥州)、カチノキ、勝軍木、サイハイノキ、アカベソ(城州・醍醐)、ゴマギ(津軽)、ヲッカドノキ(信州)、ヤマハゼ(土州)、メウルシ(江戸)、ヤマウルシ」など多くの方名が載っています。その中の「ヲッカドノキ」は多摩から秩父、甲州、信州、上州、伊豆あたりで行われている風習で、小正月(1月15日)に門口に立てる棒「オッカド棒」をヌルデで作るところから付いた名と考えられます。太目の枝を長さ30センチほどに切って2本用意し、根元に近い方を男に、先に近い方を女とします。片端の皮を剥いで、時にはそこを削り、それぞれに男女の顔を描きます。それを家の入り口に杭を打ってそれにくりつけ、穀物の豊穰を祈り、悪いものが家の中へ入ってくるのを禦ぐとして祭ったものです。よく似た風習に「粥杖」があります。同じく小正月の朝に小豆粥を炊くときにかきまわす箸のことで、嫁のしりをたたき早く子供が授かるよう祝う風習です。『枕草子』(平安中期)にその様子が書き記してあるところから、千年以上の歴史があると考えられています。また、同じ小正月に五穀豊穰を祈ってヌルデなど木地が白く、柔らかくて削りやすい材を選び、削って途中で留め置きを繰り返して花のように仕上げた「削り花」を飾る風習もありました。『延喜式』(927)の「凶書寮 御佛名装束」に「金銅花瓶二口、菊削花二枚」と、「菊削花」が供えられたことが記されています。

「フシノキ」の名は葉に付く虫癭(五倍子)を「付子」とよぶところから、ヌルデ、ヌデ、ヌリダなどの名は幹を傷つけると出る白い樹液を塗料として使ったことから「塗る手」となり付いた名です。『本草和名』(918)には「和名奴天乃岐乃牽之」、『倭名類聚抄』(931-937)にも「和名本草に云う沼天」とあり、『多識編』(1612)に「今案ずるに奴留天」、『本朝食鑑』(1692)に「沼天は即ち今の奴留天の木也」と、『和漢三才』(1713)に「奴留手」とあり、「ヌルデ」と呼ばれるようになりました。カツキ、カツギ、カツノキ、カチノキ、勝軍木については、『日本書紀』(720)の「崇峻天皇」の項に蘇我馬子宿禰と物部大連との戦いで劣勢を復するため白膠木で四天王の像を作り、戦勝を祈ったことから名付けられたと記されています。ゴマギは火にくべるとよくはじけるところから護摩木として使われ、名付けられました。漢名の「塩麩子」について李時珍(1518-1593)は「その味が酸く鹹いところから、かかる諸名があるのだ」と言い、熟した果実の表面が酸味がある塩辛い粉(リンゴ酸カルシウム $C_4H_4CaO_5$ )で覆われることから付けられたと述べています。

北海道から沖縄、および台湾、朝鮮、中国、インドシナ、インド、ヒマラヤなど広い地域の日当たりのよい道路脇の空き地や荒地などに真っ先に生える、いわゆるパイオニア樹木で、樹高5-10mになる落葉小高木。材は色が白く、質が柔らかいことから木彫や木札、木箱などに利用します。葉は互生し奇数羽状複葉、葉軸には翼があります。小葉は7-13個、長楕円形から卵状長楕円形、長さ5-12cm、急鋭尖頭で粗い鋸歯縁があります。葉に寄生するヌルデノミミフシがつくる虫癭はタンニンが豊富に含まれていて、皮なめしに用いたり、黒色染料の原料になります。染め物では空五倍子色とよばれる伝統的な色をつくりだし、インキや白髪染の原料になるほか、かつては既婚女性の習慣であったお歯黒にも用いられました。雌雄異株で7-8月に円錐花序を頂生し、黄白色の小花を多数付けます。秋には直径5-8mmほどの扁平な球形で、表面に塩味のある白い粉の付く果実をつけます。塩分の補給のためか鳥が好んで食べ、種子を広い範囲に散布することで繁殖します。

北海道から沖縄、および台湾、朝鮮、中国、インドシナ、インド、ヒマラヤなど広い地域の日当たりのよい道路脇の空き地や荒地などに真っ先に生える、いわゆるパイオニア樹木で、樹高5-10mになる落葉小高木。材は色が白く、質が柔らかいことから木彫や木札、木箱などに利用します。葉は互生し奇数羽状複葉、葉軸には翼があります。小葉は7-13個、長楕円形から卵状長楕円形、長さ5-12cm、急鋭尖頭で粗い鋸歯縁があります。葉に寄生するヌルデノミミフシがつくる虫癭はタンニンが豊富に含まれていて、皮なめしに用いたり、黒色染料の原料になります。染め物では空五倍子色とよばれる伝統的な色をつくりだし、インキや白髪染の原料になるほか、かつては既婚女性の習慣であったお歯黒にも用いられました。雌雄異株で7-8月に円錐花序を頂生し、黄白色の小花を多数付けます。秋には直径5-8mmほどの扁平な球形で、表面に塩味のある白い粉の付く果実をつけます。塩分の補給のためか鳥が好んで食べ、種子を広い範囲に散布することで繁殖します。(村上守一 記)